

## 都市計画・まちづくりと防潮堤



中井 祐  
論説委員  
東京大学大学院  
工学系研究科 教授

本稿では、筆者が関わっている岩手県大槌町の復興計画の議論の現場で感じるところを述べたいと思う。

9月と10月、岩手県は三陸沿岸計24湾の計画防潮堤高を公表した。大槌町の場合は、14.5m (T.P.、被災前は6.4m) である。平地部に限られている大槌において、これは異様なスケールである。モニタージュで確認すると、目の前の海どころか、湾をとりかこむ山々すら、おおかた見えなくなってしまうほどの威圧感である。

また、湾に注ぐ二本の川の河口部に巨大な水門二基を必要とするため、全体の完成までには相応の期間と費用を要することが予想される。無事完成しても、長期にわたる維持管理や将来の改築コスト、またそれに対する県や地元の負担は相当のものになる。あるいは、これだけの防潮堤を建設したうえで、さらに浸水域の土地の買い上げや補償、高台の宅地造成、大規模な盛土、それらに付随するインフラ投資を行うのは過剰投資ではないか、という見方がでてきてもおかしくはない。

県は、14.5m という数値は計画高さの限度を示したものであり、地元の議論に応じて低くする可能性はありうる、という見解を示している。しかし地元でいくら議論しても、綿密な専門的検討を経た数値を変更するほどの強い根拠が示せるかどうかは疑わしい。

県の検討結果を批判したいわけではない。技術力と叡智を尽くした結論だと思う。むしろ、それにもかかわらずなぜこういうことになってしまうのか、を考えたいのである。

おそらく、防潮堤というひとつのパーツだけを切り出して独立的に検討する、という方法自体の限界なのであろう。防潮堤のような防災構造物には、たとえば100年に一度という規模の自然力に対応することが求められる。つまり、防潮堤の規模や形を支配するのは、100年の時間スケールで一回程度起こりうる非日常事の論理である。一方、都市計画やまちづくりは、残りの99年と364日をいかに豊かに生きるか、という日常の論理に軸足を据えなければならない(その日常のなかに、いかにして100年に一度に対する備えを織り込んでゆくかが、勝負どころである)。

そして、非日常のなかに閉じた論理が高度に完結すればするほど、日常の論理と相容れない対立点がむき出しとなる。たとえば、一生に一度来るかどうかという津波から生命財産を守る確実性とひきかえに、海を堤防で閉ざされた狭隘地に暮らし、漁港に出るために毎回三階建

ての建物以上の高さを乗り越える日常生活上の非合理性を受け入れるしかないという、他の選択の余地を閉ざされた極端な状況に陥ってしまう。しかし本来、非日常の論理が指し示す枠組みに日常をあてはめる作業とは逆方向の、日常の論理をベースに仮組みした世界を非日常の観点から検証するという作業が、あわせて必要なのではないか。

筆者は、大槌復興の手段の主となるべきは第一に土地利用計画である、と考えている。とくに、かなりの速度で少子高齢化・人口減少が見込まれる大槌では、防災のみならず日常の活気という観点からも、市街地を集約、もしくは凝縮する方向への土地利用の誘導が最優先課題である。もし将来、不必要に広い範囲に単身高齢者世帯がまばらに散らばって住むような町になってしまえば、日常の活気やコミュニティの維持の観点から問題が大ききことはもちろん、防災上も危険きわまりない。したがって、日頃からコミュニティの意識や活動を養いやすく、万が一ふたたび巨大津波が襲来した場合でもその被害の範囲と程度を最小限に抑えることが可能な市街地や集落の形態をつくりあげていくことを、目標の第一に見定めねばならない。具体的には、浸水をまぬがれた山裾の既存集落に接続するように、もしくはそのなかにまぎれこませるように、浸水域の住居・コミュニティの浸水域外移転を進めると同時に、浸水域に残る(もしくは残らざるをえない)市街地を、相対的に避難の容易な土地に、可能な限りコンパクトに圧縮していく、というイメージである。

そして、このイメージを具体化した空間計画面案に対して、市街地を効果的かつ効率的に津波から防御し、かつ巨大津波襲来時の避難の成功確率をより高めるためには海岸防護施設がいかにあるべきか、という検討が必須だと思うのである。たとえば、県による防潮堤の計画は、あくまで現況の堤防法線を前提とした津波シミュレーションの結果を、重要な判断材料としている。防潮堤を対象を限定した検討においては、たしかに現況の法線を前提とするしかない。しかし市街地の再編を想定するならば、堤防はそれに応じたより合理的な計画法線に描き直されるべきであり(大槌の現況法線は出隅や入隅だけである)、したがってその計画法線を境界条件とする別のシミュレーションも必要となろう。それによって14.5mという高さが変わるかどうか、専門外の筆者にはわからないが、すくなくとも計画全体をチェックする材料にはなりうるはずである。

たとえわずかであれ、防潮堤を低くして計画が成り立つのであれば、より望ましい。日常から非日常を、またその逆を、双方向に粘り強く往復し続ける検討作業のなかから、両者の対立を止揚するすべが発見される可能性に、一縷の望みを託したい。